



釧路に住む

田 中 瑞 穂

釧路の町に住んで、いつの間にか二十年

が過ぎた。早いものだと思いつながら、ふり返って当時の周りの自然を思い出せば、とにかくたいへんな変わりようである。湿原を歩いて思わず穴に落ち、それが谷地まなごであることを知ったのは十数年前のことだったが、その場所でさえいまではすっかり変わっている。また、人知れず見守っていたキバナクロユリの小群生地が、あるとき突然整地されて分譲地の札が立ち、無念このうえもない思いをしたときからでも十年近くがたった。

ほかの都市にも同じような事情があると思うけれども、このように急ピッチで変わってゆく釧路というところは、ご承知のように波状の海岸段丘地と湿原、それに海岸砂丘地の三つから組み立てられているようだ。時には、極端に赤土の高台と泥炭地のどっちか、といわれたりもする。

それに加えて、道東の太平洋岸という位置は、広く冷温帯と呼ばれる気候区分の中に入れられていても、道央地方とは大きく違う。とくに雪の少ない土地がらと、したがって深い土壌凍結が冬を特徴づけているし、夏は夏で、しめっぽい海霧と、二十度を僅かに越える程度の気温に特徴づけられるもする。春三月、ほかの地方では雪どけを待つであろうが、釧路では雪どけという実感はない。冬の間、凍っていた土どけをひたすら待つのである。しかも、四月に入ってからかなりたったころ。

このような環境のところなので、大きい視野での植生の連続は、道央の冷温帯からずっとひとつづきであるといわれるにしても、実際にこの土地に住んで肌で感じているのは、決して冷温帯に位置するという感覚ではなくなくなってしまふ。それからほかならはみ出した別の自然、つきつめれば、亜

寒帯という自意識につながってきてしまふ。「緑のない町」といわれるのは、市民にとっても淋しいことに違いないが、なんといつてもその大半の理由は、このきびしい気候や土性に原因している。このことはあとでまた触れるとして、まず自慢になるようなこの土地の生物的・自然の現状を知っていたくほうが嬉しい。

その第一は、特別天然記念物・タンチョウヅルのふるさと釧路湿原。北海道を一巡してきた旅行者がこのぼうばくとした湿原を見て、本当に北海道の広さを味わうことができた、というあの湿原である。かつての古釧路湾の時代から、ずっと自然のままの推移をつづけている文字どおり原生の自然で、調査にも入りえないまったく未知のところさえふくまれている。単純に谷地、あるいは泥炭地と読みとってしまうと、裏返しに不毛の土地とはね返ってくるが、低層湿原から高層湿原までをもつたぐい稀なほどの大湿原と読みとると、裏返して自然のすばらしい財産という考えに結びつくと思うが、いかがなものであろう。

市街と隣り合うほど近いし、当然土地利用が考えられる地区があるだろうが、重要

な区域を保全する立場での青写真が、早急にできることを待望している一人である。

第二は海岸砂丘地の草原。砂地にガンコウラン、ユケモモが敷きつめ、その上を百花草がおおう原生花園のモデルになるような場所は、残念ながらここ十年の間はかなり失われてしまった。自然保護運動の視点でも、都市のそばの臨海帯の草原を保持するには、困難な問題が多すぎるようだ。別の適地に移して造成するということも考えよう。うえでは成り立つが、私が行なっている小面積の造成区の追跡調査の結果だけを見れば、悲観的にすぎる。

その第一の難点は、急増する雑草との競合の問題で、花園効果が急速に薄れてゆくのをどうしても防ぎえなかった。もともとこの海岸一帯が馬産地として名を高めたところであり、適度な放牧が花園効果をあげていたことを考えれば、この将来に対しても早急に衆知を集めることの必要を強調したいと思う。

最後に、当市の「緑いっぱい市民運動」についてご紹介したい。これはつい先日つけられた名前であるが、空白の個所に緑を補ってゆく、というような表面的な緑化の概念をふみ越えて、釧路の町に新しく緑を創造しようとする規模の運動と、私は読みとっている。前述したようなきびしい条件

を直視すれば、「通りがあるから並木をつくろう」というような常識を破って、もつとおおらかに緑をデザインすることも、時には許されるのではないだろうか。

「街に緑を！」考えてみればまことに楽しく、明るいスローガンである。自然界の秩序や、生物社会のしくみにもさまざまな知慧と手がかりを求めながら、勢いよくこの運動が展開しはじめた時期である。

以上は、私なりの短い綴りかたに過ぎないのだけれども、日ごろ釧路の自然をあれこれと考える中で浮かんでくることで、つぎのような言葉で文をおさめたい。

それは、多くの困難があると思うけれども、釧路の将来のためにどうしてもやりとげてほしいという願望が一つと、当面の課題、つまり右手に原生のままの湿原をかかえ、左手に荒廃(?)した町の緑をかかえて、いわば保全と回復という両方の道を同時にふみ出してゆくうえでの方法と内容の問題、とでもいうことになるであろうか。その意味で現在大切なのは、はでな動きではないが現状の細かい分析と、適確な診断を急ぐことと考えている。

(教育大学釧路分校教授)